バスケットボールの創成

水谷 豊

The dawn of the game of basketball

Yutaka Mizutani

Abstract

It is well known that the game of basketball was created by James Naismith at the International YMCA Training School (now Springfield College) in Springfield, MA, USA, and that the first game was played on December 21, 1891. Since then, the game has gained wide popularity in the USA, despite the fact that for a time it was denounced as an activity that ran counter to "YMCA philosophy". This essay attempts to trace the very beginnings of the game and to identify the major factors responsible for its growth into a top global sport. It can be concluded that (1) Naismith's original concept for the game of basketball has indeed lived up to its "unfailing potentiality" for development as an enjoyable sport. (2) The YMCA made a leading contribution to the cultivation of physical education at that time, and to the rapid popularization of the game through their network in the USA. (3) The social and cultural changes in the last two decades of the 19th century in the USA led to an awakening of a new era of physical education and sport. Thus the game of basketball, originally designed to be played as an indoor ball game during the winter season to sublimate students' "play instincts" at the International YMCA Training School at that time, finally grew to become a global sport.

Key words : new game, James Naismith, YMCA

(Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 50: 249-258, May, 2005)

キーワード：新しいゲーム，J. ネイスミス，
YMCA

はじめに

バスケットボールが誕生したのは1891年のことだが，その5年後の第1回近代オリンピック

(1896年・アテネ大会) から直ちにプレイされたわけではない。公式競技種目になったのは男子が1936年(第11回・ベルリン大会)，女子が1976年(第21回・モントリオール大会)である。“創始国”アメリカは男子が1936年—1968年(第19回・メキシコシティ大会)の間，制覇し続けた。そして，1972年(第20回・ミュンヘン大会)に

日本バスケットボール協会
〒150-8050 東京都渋谷区神南1-1-1
連絡先 水谷 豊

Japan Basketball Association
1-1-1, Jinnan, Shibuya-ku, Tokyo, Japan 150-8050
Corresponding author yutaka.m@guitar.ocn.ne.jp

当時のソ連に苦杯を喫して、初めて王座から陥落した。だが、間髪を容れず、1976年（第21回・モントリオール大会）に金メダルを奪回し、その後は2000年（第27回・シドニー大会）まで再び君臨し続けた。この経過のなかでアメリカが1992年（第25回・バルセロナ大会）に初めてプロのNBA（National Basketball Association）プレイヤーで編成したチームで出場した。アメリカのゲームはことごとくテレビ放映され、もっとも新しい洗練されたプレイが一気に地球の隅々まで駆け巡った。これが誘因となり、世界各国に大きなレベルアップをもたらした。なかでもヨーロッパ地区のそれは目覚ましく、男女プロリーグの振興につながった。やがて、優秀なプレイヤーのNBAへの流入が年ごとに増加し始め、逆に“NBA洩れ”したアメリカの優れたプレイヤーのヨーロッパ地区への流出も常態化した。アメリカでは2000年以降、NBAを模したかごとくの子女子プロリーグ（WNBA：Women's National Basketball Association）が発足し、この定着に伴って男子と同様に主にヨーロッパ地区とのプレイヤーの流出・流入が年を追うごとに増加している。

このような国際バスケットボール情勢の影響はまず男子に生じた。1992年のオリンピック・バルセロナ大会では「勝敗は度外視。NBAチームと正規の手合わせができるだけで十分」とばかり、ゲーム開始前に対戦チームがにこやかにNBAスタープレイヤーと記念写真を撮る有り様であった。ところが、ヨーロッパ各国からNBAに来ている“出稼ぎプレイヤー”はオリンピックと世界選手権大会では帰国し、「本国チームのプレイヤー」に変わる。当然、アメリカとのチーム力は拮抗し始める。2002年に開催された世界選手権大会（於・インディアナ州インディアナポリス）では遂に予想外の第6位となり、アメリカの“不敗神話”が潰えたのはまだ記憶に新しい。

けれども、国際バスケットボール界におけるオリンピックや世界選手権大会の覇者にいかなる変化が生じようとも、バスケットボールの母国アメリカがこれからも世界の冠たる“バスケットボール王国”であり続けることは必定であろう。それ

はNBAにおけるプレイヤーの“グローバルイゼーション”—アメリカから他国への流出と他国からアメリカへの流入—は今日ほぼ5大陸すべてに及んでいるからである。

そこで、本稿ではいま一度アメリカにおけるバスケットボールの誕生およびその初期に遡及し、そこにまつわることに着目して若干の考察を試みながら、近代スポーツの一つとして確立したバスケットボールの「創成」の検証としてまとめることとする。

Ⅰ バスケットボールの誕生

1891年12月21日、アメリカ・マサチューセッツ州スプリングフィールドの国際YMCAトレーニングスクール。インストラクターのJ. ネイスミス（James Naismith）は創案に呻吟すること数日間、徹夜明けのこの日の朝、とうとう‘頭上の水平面のゴールにボールをショットし合う形式の新しいゲーム’を描き終えた。そして、ルールを作成した。意外なことに、それはわずか13条のみであった。しかし、その多くは今日なお底流に脈々と生き続けている。まず、それを検証することによってバスケットボールの原点を概観してみる（水谷、1980；Wolff, 2002）。

第1条 ボールはサッカーのボールを使用し、片手あるいは両手で、どの方向にパスしてもよい。

サッカーとアメリカンフットボールのボールがネイスミスの目に留まった。「アメリカンフットボールではボールを保持したプレイヤーの移動が認められているので、持ちやすいように楕円形になっているのだろう。しかし、この‘新しいゲーム’では<ボール保持者の移動>を禁ずるのだから、楕円形でなくても困ることはない…」と考え、円形のサッカーボールを使うことにした。1894年にスプリングフィールドからそう遠くないチコピーフォールズという町にあった自転車製造会社（オーバーマン・ホイール社）が初めて専用球を売り出した。これが契機となって、専用球の開発、製造販売が始まった。

第2条 ボールは片手、あるいは両手でどの方向にたたいてもよい。ただし、拳（こぶし）でたたくのは禁止する。

ネイスミスは「狭い体育館でおこなうゲームだからラフプレイにつながる“芽”を極力つみ取っておく必要がある」と考えた。拳の使用は危険と判断したので、このように定めた。

第3条 ボールを保持したまま位置を変えることを禁ずる。ボールをキャッチした地点に踏みとどまり、そこからパスしなければならない。かなりのスピードで走っているときにボールをキャッチしたときは、もしストップしようと努力していれば、1—2歩は許されることもある。

国際YMCAトレーニングスクールの“体育館”はどちらかと言うと‘体育室’に近い屋内運動場であり、およそ11m×13m程度のフロア面積で、ゲーム中にボールを保持したまま走り回ることができるような広さではなかった。

ネイスミスは「‘新しいゲーム’でアメリカンフットボールのようにボール保持者に対してタックリングすることを許せば、それはまさに“捨て身の危険行為”となる。アメリカンフットボールではボールを保持して思うままに位置を変えることを許しているから、それを阻止するためにタックリングが必要となる。しかし、逆にボール保持者が位置を変えることを禁ずれば、ボール保持者は必然的に‘その地点’から移動できないことになる。そうすれば、おのずからタックリングも不要になる」と考えた。つまり、ボール保持者の不正行動（ボールを保持した位置から他の位置への移動）に厳しい規制を設けたことになる。これが今日いう『トラベリング』（Traveling）に結びついた。さらに、（ネイスミスはまったく予想だにしていなかったことだが、）激しく迫って来るディフェンスにボールを奪回されまいと、ボール保持者がコンパスの針のように片足を（その地点から動かさずに）定点とし、もう片方の足を踏み出し、踏み変える動作を連続することによってボールをキープする『ピボッティング』（Pivoting）が生み出されてきた。しかし、ボール保持者は‘その地点’から移動できないことには変わりな

い。当然、ボール保持者はもはや“袋の鼠”も同然である。ディフェンスはいっそう激しく執拗に食い下がってくる。とうとう、ボール保持者はとっさの“窮余の一策”とばかり、ディフェンスから遠い方向にボールを軽く弾ませ、ボールが空中にある間に‘その地点’を離れ、急いでボールを追いかけて保持し直すことによって一瞬ではあるが、ディフェンスから逃れることができた。結果的に、これを繰り返せば、ボールを保持したまま位置を変えたことにはならないので、ルールに抵触しない“異なる位置への移動手段”として『ドリブリング』（Dribbling）が生み出された。

第4条 ボールは両手で保持しなければならない。両腕や、からだを用いてはならない。

ネイスミスはもともとサッカーやアメリカンフットボールとは“ひと味異なる”ゲームを思い描いていたので、プレイヤーがボールを蹴ったり、小脇に隠すように抱えて走ることは想定していなかった。

第5条 どのような方法であれ、相手を小突いたり、つかまえたり、押したり、つまずかせたり、たたいたりすることは許されない。この規則の第1回目の違反は1個のファウルとする。2回違反を犯した場合はつぎのゴールが成功するまで退場とする。もし、故意に相手を傷つけようとするようなプレイであると見なされた場合はゲーム終了後まで退場とする。この場合の交代プレイヤーの出場は認めない。

いかなる暴力的行為も、あるいはラフプレイも徹底的に排除しようというネイスミスの並々ならぬ断固たる気持ちが表われている。それを『ファウル』と称し、その種類を明示した。また、ゲームが“荒れる”のを防ぐために「罰と代償」の考え方も明示している。

第6条 第2—5条で述べたことに1回違反を犯すごとに、1個のファウルとする。

このルールでは今日いう「ファウル」も「バイレーション」も十把一からげになっている。その後、『フリースロー』（1点）が導入されて、「代償」が明確になった。

第7条 両チームのどちらかが連続して3個の

ファウルを犯すと、その相手チームに1ゴールを与える。連続とはその間に相手チームがひとつもファウルをしない場合とする。

これが「代償」の具体策としての“ボーナス得点”の考え方の基になった。

第8条 ボールが投げられるか、あるいは、たたかれてショットされ、バスケット内に入れば、ゴール成功である。もし、ボールがバスケットの縁に止まったり、また、ショットしたときに相手がバスケットを動かしたりした場合も、ゴール成功とみなされる。

当初のバスケットは底が付いた“籠”が用いられたので、ショットが成功すると、ボールは当然ながら籠の中に残っている。そこで、立てかけた梯子を使ってボールを回収するか、2階のバルコニーに上がってボールを籠から取り出していた。これでは非常に不便だし、ゲームの流れも止まってしまう面白くない。これを解消すべく、1906年から「底」を取り払い、ボールが“通過”するようにルールを変更した。

また、当時、バスケットは2階で立ち見している観衆のすぐ足元に取り付けられていたので、成功しそうなショットのボールを足や手で妨害することがあった。そこで、バスケットの真後ろの部分に木板や金網を張り、妨害されるのを避けた。そこから、『バックボード』が生まれた。

第9条 ボールがコート外に出た場合は最初にコート外のボールを保持したプレイヤーがコート内にスローインする。そのとき、スローアーは5秒間だけ相手チームから妨害されないで、ボールを保持することを許される。もし、どちらのチームのボールとなるか判定がつかないときは副審がそこからまっすぐ投げ入れる。スローインのさいに5秒間を超えると、ボールは相手側に与えられる。もし、スローインのとき、どちらかのチームがゲームの再開を遅らせようとした場合は副審がそのチームにファウルを宣告する。

言うならば“早い者勝ち”である。当然、凄まじいまでのボール争奪戦がコート外で繰り広げられた。ネイスミスは「私が教えていた初期のチームではコート外に出たボールを真っ先に確保しよ

うとボールめがけて殺到し、その勢いの余り、暖房器の角におつかってできた‘傷’を自慢げに見せ合うのを楽しんでいる者がいた」と述懐している。だが、1902年にルールが今日のように【最後にボールに触れたチームの相手チームがスローインする】と改正されてから、このようなことはなくなった。また、この改正前の一時期、コートの外周を金網などで囲ってしまい、コート外のボール争奪戦が観客席に及ばないようにしたときもあった。ここからバスケットボールのゲームを“ケイジゲーム”(Cage game)と言い、プレイヤーのことを‘ケイジャー’(Cager)と呼ぶようになった。この表現が今日なお使われているのは興味深い。また、この『5秒ルール』も今日ほぼそのまま使用されている。

第10条 副審はプレイヤーを審判し、ファウルを記録し、連続3回のファウルがあった場合は主審にこれを知らせる。主審は第5条によってプレイヤーを失格させる権限を有する。

第11条 主審はプレイを判定し、いつボールがインプレイとなるか、インバウンズになるか、どちら側のチームにボールが与えられるのかなどを決定し、競技時間を計測する。また、ゴール成功を確認し、その数も数える。このほかに、他の(種目の)ゲームで主審が通常おこなっているような任務も務める。

ネイスミスはこのように当初から主審、副審の役割・任務を定めていた。しかし、当時のガード(のポジション)のプレイヤーはバスケット近辺にいる副審からは遠く離れた位置でプレイすることが多かったので、副審の目が行き届かずファウルと判定されることが少なかった。そこで、主審、副審の役割の見直しがおこなわれ、両審判が一体となってプレイもプレイヤーも判定するようになった。

第12条 競技時間は15分ハーフとし、間に5分間のハーフタイムを置く。

今日、バスケットボールはあらゆる対象レベルミニ、中学校、高校、大学、男女プロなどに普及しているので、競技時間は一様ではない。近年のルール変更は競技時間が長くなる傾向にあ

る。国際ルールではピリオド制となり、1ピリオド10分、第1—2ピリオドの間、第3—4ピリオドの間に2分間のインターバルを設け、さらに第2—3ピリオドの間に10分もしくは15分間のハーフタイムが置かれている。以前は20分ハーフ制で、ハーフタイムは10分間であった。また、ミニでは1ピリオド6分、ハーフタイムを5分間とし、各ピリオドの間は1分間のインターバルが置かれている。このように競技時間は対象レベルによって異なり、多様化している。

第13条 ゴール成功が多かったほうのチームが勝者となる。もし、同点の場合はキャプテンの同意のもとに、つぎのゴールが成功するまでゲームを続ける。

ネイスミスは「バスケットボールはプレイヤーが主体的に取り組むべきものであって、コーチによって左右されるものではない」と考えていたので、キャプテンを高く位置づけていた。ネイスミスの願いのひとつは「バスケットボールを通じたプレイヤーのモラルの向上」であった。だから、プレイヤーに意志決定の選択肢を与えれば与えるほど、プレイヤーの人間的な成長により寄与するという信念を抱いていた。だから、延長戦の継続の是非を話し合わせることもその一環であるという気持ちがあった（水谷、1980）。

II 誕生までの経緯

さて、ネイスミスがバスケットボールを創案するに至った経緯の発端を顧みておかねばならない。このことについて、彼はつぎのように述べている（水谷、1980）。

1891年の夏、国際YMCAトレーニングスクールに全米各州のYMCAの体育担当スタッフを集めて、夏期講習（Summer School）がおこなわれた。このとき、受講者は異口同音に「冬季のとくに体育館でおこなう体育活動の会員たちは体操中心の内容にはもはやまったく関心を示さなくなっている」と各地のYMCAの苦境を報告した。そして、従来の体操にとって代わる“新しい種目”の必要性

を訴えた。ともかく、冬季の体育館でおこなう種目として、いままでにない、なにか“新しいゲーム”が絶対に必要であり、冬になるまでにそれを準備しなければならないことは不可避となった。

ところで、1870年代末ころのアメリカでは大学の学生たちが、とくに、陸上競技とアメリカンフットボールの大学対抗戦を始めるほどになっており、学生たちの人気種目となった。他方、大学時代にスポーツを経験した者が卒業後に就職して都市に住むようになり、余暇にスポーツをしようと考えたのはもっともなことだ。そこで、彼らはスポーツができる“クラブ”を探した。当時は町のアスレティック・クラブ、サイクリング・クラブ、あるいはYMCAぐらいしかなかった。ところが、このようなクラブは冬季に入ると、競技スポーツのような種目は用意されておらず、もっぱら旧来の体操ばかりであった。かつて、大学で競技スポーツをやってきた会員たちが、いつしかそのクラブの中心的存在となっていた。そして、アメリカンフットボールの面白さと集団体操のそれを比較して、冬季種目への露骨な不満を隠さなかった。つまり、新しい世代の若者たちは旧来の体操一辺倒の体育による身体の鍛錬そのもよりは、むしろ、スポーツする喜びや楽しさを求めたのだ。

夏季講習に参加した全米の各YMCAの体育担当スタッフたちはこのような状況について、熱心に論議を交わした。しかし、誰一人として、この問題を解決する具体策を提案できる者はいなかった。

この事態を重視した国際YMCAトレーニングスクールの体育部担当主事（全米各地のYMCAに巣立っていく体育スタッフ）養成科の科長L. H. ギューリックは同科の5人の教員とともに即応した。（ネイスミスは1890年9月に同科に入学、翌年の1891年6月の卒業と同時に教員として登用されていた。）初め、スウェーデン体操・ドイツ体操・フランス体操を対象に検討したが、妙案は浮かばなかった。つまるところ、「面白く

て、覚えるのも、プレイするのも簡単で、しかも冬季に照明のついた屋内でできる“新しいゲーム”が必要である」という結論に達した。ネイスミスはこのときのギュリックとの話し合いをつぎのように記述している（水谷，1980）。

ギュリック博士は染料や合成薬品のよう
に、各種の物を合成して製造する化学物質の
場合を例に引いて、「冬季に屋内でおこなう
“新しいゲーム”というのはいり得ないの
ではないか。もし、そう言われるものがあつた
としても、それはただ単に既存のゲームの諸
要素を合成したものには過ぎないのではない
か」と述べた。それに対して、私（ネイスミ
ス）は「もし、そうであるとすれば、私たち
が求める“新しいゲーム”を作り出すことは
可能だと思う。既存のゲームの要素を取り出
し、それらを再合成することによって作り出
せるのではないか」と述べた。

国際YMCAトレーニングスクールには体育部
担当主事養成科と一般事業担当主事（総務・会
館・宗教・会員などのYMCAにおける体育館以
外の部門の担当者）養成科の二つが設けられてい
た。秋季のアメリカンフットボールのシーズンが
終わるまで、両科の体育の授業は合併しておこな
っていた。それが冬季になると体育館で別々にお
こなわれ、体操を中心とした授業をおこなってい
た。これに反発したのが一般事業担当主事養成科
の学生たちであった。かつて大学時代にスポーツ
を経験してきた者が多く、いまさら各種体操系の
活動によって身体を鍛え、体格・体力の向上を目
指す気持ちはなかったからである。だから、担当
者を変えてもクラスの反応は変わらなかった。ネ
イスミスはこの状況をみて、つぎのように指摘し
ている（Naismith, 1936）。

担当者が問題ではなく、指導内容が適切で
ないことが問題なのだ。あの一般事業担当主
事養成科のような、いわゆる“おとな”相手
の授業は身心の鍛錬を目的とするものではなく、
むしろ、レクリエーション的なもののほう
が適切なのだ。かつて、大学時代に大いに
発揮していた彼らの“遊戯本能（スポーツ・

ゲームへの欲求）に応えるようなものが向い
ていると思われる。

万策尽き果て、立ち往生した教員たちを見
とどけたギュリックはネイスミスに白羽の
矢を立てた。固辞するネイスミスにまったく
耳を貸すことなく、「一般事業担当主事養成
科の担当」と「新しいゲームの考案」という
二つの懸案の解決を命じた。その結果、ネ
イスミスの手によって、バスケットボールが生
み出された。

III 誕生前後の背景

ネイスミスは「冬季に屋内でプレイできる新し
いボールゲーム」の案出に成功した後の翌年早々
に、全米各地のYMCAにも送付されている国際
YMCAトレーニングスクールの「彙報」（“The
Triangle”）にバスケットボールのことをつぎの
ように紹介した（Naismith, 1892）。

本校は読者各位に「新しいボールゲーム」
を披露したい。このゲームは各YMCAで必ず
や人気種目になる要素を備えていると思われ
る。グラウンドの競技場でアメリカンフット
ボールをプレイするときと同じ気分を体育館
で味わえるからだ。このゲームは（YMCA
の）会員なら誰でもプレイできるし、運動量
も豊富だ。すなわち、ゲーム中に判断力、各
部位の筋肉の相互作用を要するので、オール
ラウンドな効果を期待できる。各YMCAの
チーム対抗戦も可能だ。剛胆さ、その場その
場に応じた心の働きや動作の素早さがより優
れたチームが勝利するにちがいない…。

あたかも、（体育館でもプレイできる当時の人
気種目のアメリカンフットボールに匹敵する）な
にか“斬新な種目”を渴望していた全米各地の
YMCAは一斉にバスケットボールに飛び付いた。
1892年4月、ニューヨークのブルックリン
YMCAのセントラル・ブランチ（分館）の体育
担当スタッフからつぎのような書簡がネイスミス
に届いている（水谷，1980）。

私のYMCAでバスケットボールを会員た

ちにやらせてみたところ、予想をはるかに上回る“好反応”でした。その後間もなく、各ブランチごとにチームが生まれ、「ニューヨーク YMCA リーグ」を結成しました。もっとも優れていたのは当然、私の YMCA チームです。冬季種目から春季種目になってもなお他のブランチ YMCA と凌ぎを削り合っています。

しかしながら、この書簡が起点となって、以後、バスケットボールが順風満帆に普及、振興の途をたどったわけではなかった。その第1の理由は「それまで体操系の活動ならば50—60人を一度にこなせる。だが、バスケットボールはわずか10人そこそこでフロアを独占してしまう」ことであった。とりわけ、創設が古い YMCA ほど、その“アレルギー症状”が顕著で、体育担当スタッフは公然とバスケットボールの価値に疑問を呈した。ネイスミスが第2の理由として、つぎのようなことを指摘している（水谷，1980）。

当時の体育担当スタッフの多くは体操中心の活動内容の指導には慣れていたし、優れてはいたが、バスケットボールのような競技スポーツの指導の経験が欠如していた。これが多くのチームがゲーム中にラフプレイやスポーツマンシップに反する行為を繰り返す原因となった。

そして、とうとう、フィラデルフィア YMCA のノース・ブランチのように体育館からバスケットボールを締め出してしまうところも出てきた（水谷，1980）。しかし、こういう傾向とは逆に、バスケットボールを徐々に容認していく傾向も増えていった。その理由をネイスミスがつぎのように分析している（水谷，1980）。

第一は YMCA にとって全米規模の盛り上がりを見せるバスケットボール人気を無視できない勢いとなってきたこと、第二はバスケットボールの基本的な骨組み（①ボールはいかなる方向にパスしてもよい、②ボールを保持したまま移動してはならない、③ブロッキング、タックリングなどの身体接触は禁止する、④ゴールは頭上に水平に設置する、⑤ゲ

ームの目的はボールを味方がキープして、相手ゴールへのシュートを入れ合う）がまったく斬新だったことだ。

また、これとは別に、つぎのような理由もあった（Bunn, 1941）。

1891年にL. H. ギューリックがネイスミスに“新しいゲーム”の考案を命じたとき、ネイスミスの先見の明と誠実さによってこのバスケットボールの隆盛が最初から確実に約束されていたようなものだ。その第一の理由と考えられるのが「屋内ゲーム」とすることを念頭に置いていたことだ。第二のそれはきちんと原則をたて、プレイの“許容内容”を明示していたことだ。

それはともかく、ネイスミスに“新しいゲーム”の考案を命じたL. H. ギューリックはつぎのような考えを抱いていたとされる（水谷，1980）。

1890年代初頭の体育はほぼ独占的と言えるぐらいに「体操」一辺倒であった。それには二つの流れがあった。一つは手具体操を特徴とするドイツ体操であり、もう一つは自由な身体のごきが特徴となっているスウェーデン体操系のものであった。（当時）われわれが「競技スポーツ」と呼んだ種目は極少で、ゲームをやるにもその術（すべ）がなかった。ところが、ちょうど時を同じくして、大学スポーツ界の主流は「体操」から「競技スポーツ」に変わりつつあった。それは1870年代から芽生えた大学スポーツの胎動の確実な歩みの結果でもあった。だが、（当時の）体育の“本流”にはなり得ていなかった。ところが、秋季にアメリカンフットボールに打ち込んでいた者たちにとっては冬季の（体育館における）種々の体操は退屈かつ、つまらない時間の無駄以外のなにものでもなかった。喩えて言えば“食欲があるのに空腹な者”を満足させるにはまったくほど遠かったのだ。ましてや、内面的には「言わずもがな」であった。かくして、大学時代にスポーツの楽しさをたっぷりと味わってきた者たちに残ったのは燃え切れない「苛だたしさ」だけだったのだ。

誕生直後からのバスケットボールはあたかも“野火”のごとく広まっていったという。その経路は国際 YMCA トレーニングスクールを出発点とする全米津々浦々に及ぶ“YMCA ネットワーク”であった。しかも、当時の YMCA は最先端の社会的体育・スポーツ活動組織であったと言っても過言ではない。加えて、バスケットボールをプレイできる体育館を備えていた。だから、しばらくはバスケットボールというのは“YMCA の専用スポーツ”と思いこんでいる人々が多かった (Browne, 1941)。

つまり、1891年に“鮮烈なデビュー”を果たしたバスケットボールはいわば「時代の要求」にまさに適合したスポーツであった。そればかりか、ネイスミスの意匠には「プレイすればする程、観戦すればする程、益々引き込まれる」というスポーツの本質の要諦がじつに巧みに込められていたことがわかる。

IV 普及の概況

バスケットボールが誕生してから3年後の1894年1月、ネイスミスが『バスケットボール入門』と題して、つぎのようなことを書いている (Naismith, 1894)。

- 各ポジション（フォワード、センター、バック）にプレイヤーを配置する前に、つぎのことをよく説明しておかなくてははいけない。
- ①ボールは片手、もしくは両手以外で保持してはならない。
 - ②ボールを保持している者はその場から他の位置に移動してはならない。
 - ③ボールを足で蹴ったり、拳（こぶし）で叩いてはならない。
 - ④（アメリカンフットボールでは許されている）タックリングやホールディングをしてはならない。

プレイヤーはゲーム中にこの4点を順守しなくてはならない。アメリカンフットボールよりも野球の経験者のほうがバスケットボールでは優秀なプレイヤーになるものと思われる

る。その理由はアメリカンフットボールでは「ラフプレイ」（“力と力の激突”）に対する“備え”さえあれば通用し、逆に、野球をやっていたプレイヤーは「ラフプレイ」に対する“備え”は不要だし、他のどんなゲームよりも“当意即妙”が求められるバスケットボールのプレイに柔軟に適應できる素地を有しているからだ。

人数が同じ二つのチームをポジション別にコート上に配置する。フォワードは相手チームのバックに近いところに立たせる。そして、ボールを保持したらコート中央に位置する味方センターにパスでつなぐ。ボールをキャッチしたセンターは投げるか、平手で叩いてフォワードにつなぐ。プレイはセンターを經由して展開していく。ボールがアウトオブバウンズになったときは審判がゲーム再開を指示する。

走っていたプレイヤーが空中にあるボールをキャッチした後、その位置で直ちにストップしようとしてみたが止まりきれず、思わず2-3歩動いてしまったときは審判が斟酌して違反としないように判定する。また、ボールを保持しているプレイヤーがボールを取り返そうとする相手から激しく迫られたとき、思わず（片足を同じ地点に着けたまま）もう片方の足を踏み変えてボールをキープしようとした場合も違反とはみなさない。ただし、初めに同じ地点に着けていた足を動かして、他の地点に移したときはファウルとなる。

このネイスミスの記述から6ヶ月余後の1894年7月に、国際 YMCA トレーニングスクールの体育部担当主事養成科の教員の A.T. ハルステッドがこのようなことを記している (Halsted, 1894)。

全米各地のどこの YMCA でも体育活動の人気（登録会員数）は指導担当者の人柄と能力、その YMCA の所在地（通う便利さ）、体育館の設備・用器具の充実さ、そして、なによりも指導内容の新鮮さと質の高さで決まる。しかし、このようなことを満たしているとしても、人気を維持していくためのいろい

ろな課題のうち、もっとも重要な“決め手”は会員たちの「人間が本来もっている遊戯本能」をいかに的確に揺さぶるかということである。従来、この点ではYMCAが十分に会員たちに応えていたとは言い難い。このような状況にあって、ただひとつ、最近のバスケットボールは“例外”と言えよう。

けれども、だからとて「まったく問題なし」とするのは安直である。競争的要素を備えた活動が取り入れられようと、いかに教育的な体操が始められようと、どのような遊戯（簡易ゲーム）が紹介されようと…、やがて、そのYMCAの会員たちにとどまることなく、近隣のYMCAとの友好試合を模索し始める。ホームチームは当然ビジティングチームに勝とうとする。もちろん、これは望ましい一面もある。なぜならば、正しく“対抗戦”が管理運営されれば、会員たちの人気（彼らの気持ちやYMCAにつなぎとめておく可能性）が下落するとは考えられないからだ。そのYMCAで、市内のYMCAで、地区のYMCAで、あるいは数州のYMCAで結成したさまざまな『バスケットボールリーグ』はYMCAにおける体育事業のなかでは体操や陸上競技のライバルとなっている。と言うのは、他の野球やアメリカンフットボールと同じように将来性のある競技スポーツとして堪えうように思えるからだ。他に衰退していくものがあったとしても、バスケットボールの人気は定着していくように見えるからだ。また、競技スポーツは観衆を惹きつける。ピリツとして、気合いが入っている競技スポーツに多くの観衆がつめかけるのは当然のことだ。

ところが、このようにYMCAにおいてバスケットボール活動が盛んになっていくと、経費の増大が伴う。チームは交通費が必要になるし、観衆は観戦料を払うことになるし…、とにかく、経費がかさむ。したがって、「金をどのようにして工面するのか？」という難問に突き当たる。考えられるのはそのYMCAが地元で根強く暮らしに溶け込んでおり、新

規入会者が絶えないという状況がもっとも望ましい“資金源”となろう。あるいは、しっかりしたマネジメントのもとで開催する「リーグ戦」への観衆の入場料収入も期待できよう。

この記述における「YMCA」というバスケットボールの誕生→普及を担った組織についてのつぎのような指摘は参考になる（Johnson, 1979）。

1880—1900年の北米におけるYMCAの興隆は「保守的伝統の後退」、「急速な健康志向の高まり」、「束縛のない自由な信仰という意識への変化」に負うところが大きい。人々の「信仰の見直し気運」およびその「社会的分別」が博愛主義に根ざしたいくつかの社会的改革団体の創設に結びついた。なかでもYMCA（基督教青年会）はなによりもこの適例である。ただ、伝道的熱意という当初の動機からやがて宗教に関係のないヒューマニズムへと次第に理念を変貌させていったのだが—。

今日、バスケットボール誕生の地となったアメリカ・マサチューセッツ州スプリングフィールドへの空路のゲイトウェイのひとつはハートフォード（コネティカット州）である。乗り入れ航空各社の案内に“Hartford/Springfield”と表示されているほどのごく“隣町”である。このハートフォードYMCAについて、つぎのような記述がある（Allen, 1894）。

ハートフォードYMCAにおける過去2年の冬季バスケットボールリーグの結果は他のYMCAへの優れた「手本」となろう。当然、初めからきちんと組織化されて始まったわけではない。気の合う仲間どうして結成されたいろいろなチームが思い思いに活動していた。このYMCAは毎週土曜日の夜は公式な活動が組まれていなかった。しかし、YMCAの本音は「施設の活用と収入の増加」であったが、建前としては「地域住民、それも若い人々の土曜日の夜の来館を歓迎する」としていた。ところが、この状況が契機となった。すなわち、“長老的会員”や関心を持った会員たちが話し合いを開き、バスケットボールリーグの結成とリーグ戦の立ち上げが

決まった。

体育館を使用するすべてのチームに構想が説明され、賛同を得た。と同時に、館内にリーグ戦の大きな掲示が張り出された。新聞社にも案内が送られ、報道を約束してくれた。体育館使用チームの総会をおこない、組織化と代表者の選定をおこなった。およそ70名の出席のもと5名の代表キャプテンを選び、組織が結成された。この過程で中心的役割を担ったのが銀行員、保険外交員、高校生などであった。二、三の異論もあったようだが、話し合いはまとまった。

それから、「リーグ」加盟チームは名称、ユニフォームカラーを決めた。各チームのユニフォーム着用と費用負担は投票で決着がつけられた。さらに、5名の代表キャプテンの集まりを実行委員会とすることも投票で決めた。委員会がリーグ運営管理とゲームの日程の作成にあたることとなった。

おわりに

初めに述べたように、バスケットボールは1936年のオリンピック・ベルリン大会から（男子）公式競技種目に採用された。“創始国”のアメリカも出場することにし、1936年4月3日―5日に“全米総合選手権大会”を開催して、「代表チームメンバーの選考」をおこなうことにした。このとき、大学から5チーム、実業団・クラブ（AAU）から2チーム、それにYMCAから1チームの計8チームが出場した。YMCAチームは3月に開催された全米YMCA選手権大会の（優勝チームに資格問題が生じたので）準優勝のペンシルバニア州のウイルマーディングYMCAチームであった（Bingham, 1936）。つまり、バスケットボールがオリンピック種目になった頃のアメリカのバスケットボール界ではYMCAもその主流の一角を占めていたことがわかる。つまり、バスケットボールは文字通り“YMCAスポーツ”としての道程を歩んで発展してきた証左であろう。換言するならば、全米各州各地に所在する無数の

YMCAというネットワークを通じて、いわばアメリカの社会・文化の源流をなす“グラスルーツ人気”を得て、成長してきたことがわかる。

このように「バスケットボールの創成」を顧みると、つぎのような指摘に辿り着かざるを得ない（Johnson, 1979）。

アメリカのYMCA史を顧みると、19世紀末の20年間は画期的という表現がもっとも似合う。希にみる衝撃性と活力が発露した“革新と実験”の時期であった。バスケットボールとバレーボールという“New game”の創案はなによりもこのことを物語っている。

文 献

- Allen, W.L. (1894) BASKET BALL AT HARTFORD, CONN. Physical Education, 3-4. The Triangle Publishing Company: Springfield, MA, p 58.
- Bingham, L.J. (1936) Report of The American Olympic Committee. American Olympic Committee: New York, pp. 165-172.
- Browne, J. (1941) The Y.M.C.A. Originated Basketball and Carried It 'Round the World, Naismith Memorial Committee, Basketball Hall of Fame: Springfield, MA, p 12.
- Bunn, J. (1941) The Value of Basketball. Naismith Memorial Committee, Basketball Hall of Fame: Springfield, MA, p 9.
- Halsted, T.A. (1894) BASKET BALL, Physical Education, 3-5. The Triangle Publishing Company: Springfield, MA, p 76.
- Johnson, L.E. (1979) The History of YMCA Physical Education. Association Press (Follet Publishing Company): Chicago, IL, pp. 45-47.
- 水谷 豊訳 (1980) バスケットボール その起源と発展. YMCA出版: 東京, pp. 37-116.
- Naismith, J. (1892) BASKET BALL, The Triangle, 1-10. The Triangle Publishing Company: Springfield, MA, pp. 144-147.
- Naismith, J. (1894) HOW TO START BASKET BALL, Physical Education, 11-11. The Triangle Publishing Company: Springfield, MA, pp. 179-180.
- Naismith, J. (1914) BASKET BALL, APER, 1-3. The American Physical Education Society: New York, pp. 339-340.
- Wolff, A. (2002) The Olden Rules. Sports Illustrated, November: 118-125.

（平成16年9月7日受付）
（平成16年11月6日受理）